

表現活動により気づきの質を高める生活科学習

1. 研究テーマ設定の理由

(1) 学校提案とかわって

本年度の学校提案「問い続け、学び続ける子どもたち」を受け、生活科部では、「表現活動により気づきの質を高める生活科学習」をテーマに、子どもたちが表現活動を通して多くの気づきを生むことができる学びを研究の柱にした。

「問い続ける」ことができるように、意欲的に身近な自然や人々、社会と直接かかわる活動や体験を大切にしたい。それは、見たり、聞いたり、触ったり、かいだり、味わったりと、五感を研ぎ澄ませて対象に向き合うことである。なぜなら、低学年の発達段階には、文字言語や音声言語による認識よりも、活動や体験によって認識を深めるという特徴があげられるからである。こうした活動や体験を充実させることは、子どもたちが多くの気づきや疑問をつくるきっかけとなり、「問い続ける」ことができるのである。

また、「学び続ける」ことができるように、多様な方法を使つての表現活動を大切にしたい。活動や体験したことを表現することで、自分の中に生まれていた気づきを自覚することにつながるのである。また、友だちの表現に触れることで、新たな気づきや疑問につなげることもできる。新たな気づきや疑問をもつことは、新たに学ぼうとする意欲につながり、「学び続ける」ことができるのである。

生活科の学びの中で、子どもたちが自分なりの価値を見出す過程を大切にしていきたい。そのために子ども一人一人を確かにみとりながら、授業に工夫を凝らしていきたい。

(2) 生活科でめざす子ども像

①ひと・もの・ことに意欲的に関わろうとする子ども

活動や体験などに進んで取り組んだり、「やってみたい」「次はどんなだろう」などの前向きな姿勢が見られたりする子どもを育てたい。他人事ではなく、自分事として関わることで、自ら問いを生む子どもが育つと考えている。

②新たな気づきを生み出そうとする子ども

活動や体験、表現された言葉や絵などから、新しい気づきを生み出そうとする子どもを育てたい。疑問を素通りするのではなく、繰り返し関わる中で、新たな気づきを見出したり、疑問を生み出したりすることで学び続けることができると考えているからである。

③自分自身や自分の生活と関連づけて考えられる子ども

友だちの発表を聞いて、「ぼくも前にあったのだけど…」と自分自身の経験と関連づけて考えることができるようにする。また、「わたしは、前にできなかつたけど、頑張つて〇〇したからで

きるようになりました。」などと、自分の過去を振り返り、成長した自分を感じ、これからも成長していきたいと思うことができるようにする。生活全般にわたって関連を見出し、さらに学ぼうとする子どもを育てたい。

2. 生活科学習における「問い続け、学び続ける子どもたち」

(1) 生活科におけるみとりと支援

生活科において、自分自身と関連づけながら学ぶ子どもを育てるためには、対象に価値があると感じさせることが必要である。対象に価値があると感じさせるためには、興味や関心をもてる教材を選択し、単元の導入や展開・学習環境を工夫する必要がある。そのためには、子どもたちが何に興味を示し、何に驚き、何を必要としているのかなどをみとり、学ぶ価値に近付ける工夫をする必要がある。

また、新たな気付きを生み出させるために、表現活動を充実する。表現活動とは、言葉・絵・動作・劇化などである。同時に、ICT機器を活用し、写真や動画などを効果的に扱うことで表現活動の充実を図りたい。さらに、生活科の時間に限らず、朝の会や他教科の発表などでも、「よく聞いてよく考える」活動時間を確保するようにしたい。

(2) 実践事例

※校内授業研を受けて追記

3. 研究の展望

「問い続け、学び続ける子どもたち」を実践するために、以下の点を重視して研究を進める。

(1) 教材との出会わせ方の工夫、効果的な具体物や事例の提示

子どもたちが意欲的に対象に関わっていくことができるように、対象との出会わせ方を工夫しなければならない。そのためには、子どもたちの日頃のつぶやき、子どもたちの思いや願いを中心に出会わせたい対象を選択したり、子どもたちの驚きを生む具体物や事例を提示したりするなどの工夫を考えていく必要があると考える。

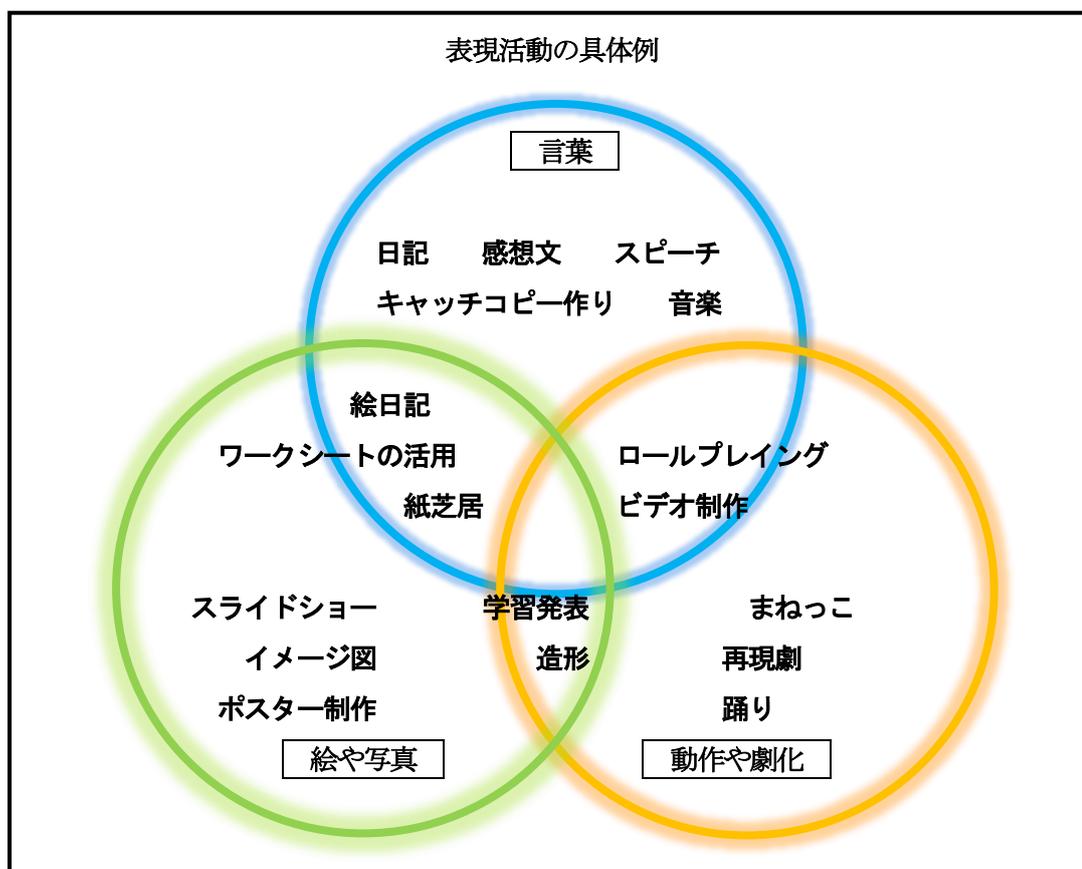
(2) 子どもが意欲的に活動する場・環境

子どもたちが対象とじっくり向き合い、十分に活動することができるように、場や環境の設定を行っていく。そのためには、見学先とのアポイントメントを密にし、子どもたちがその環境でどんな気付きを生むことができるかを予想していく必要があると考える。

(3) 表現活動の充実

活動や体験を通して、知ることは多くある。しかし、見聞のみで知識や技能が身についたり、新たな気付きにつながったりするとは考えにくい。そこで、表現活動を充実させることで、友だちの考えに触れたり、対象に対する新たな見方ができたりするのではないかと考えている。

表現活動は、言葉・絵や写真・動作・劇化などの方法が挙げられるが、具体的にどのような取り組みを行うことで主体的にかかわろうとするのか考える必要がある。以下の表にその例を挙げる。



4. 研究の評価

子どもたちの行動観察記録を適宜とる。行動観察記録には、学校生活の様子や、時には家庭での取り組みの情報を保護者や本人から得て記録していくことも含め、評価する。また、初発の気付きと、表現活動後の新たな気付きの変化や子どもの変容をワークシートなどの表出物から評価する。